

Schauspieler

Ein berühmter Schauspieler hatte einmal in einem Theaterstück einen langen Brief laut vorzulesen. Natürlich stand der Brief auf einem Blatt Papier geschrieben, und sein Kollege mußte es ihm der Rolle gemäß überbringen. Der Schauspieler hatte deshalb auch den Text nicht auswendig gelernt. Aber der Mitspieler gab ihm eines Abends ein leeres Blatt in die Hand. Einen Augenblick sah der Schauspieler verblüfft auf das unbeschriebene Papier, dann reichte er es dem Überbringer zurück und sagte: "Ich habe heute meine Brille vergessen. Da--- lies mir den Brief vor!"

ある有名な俳優のお話をしましょうか！その名演技ぶりといってもいいかな？長い手紙を大声で読み上げることになっていました。もちろん当然のことですが、手紙の文句はちゃんと紙に書かれていましたし、覚えていなくてもそれらしく読むだけで十分でした。ただ手紙は役割上、共演者から受け取るという筋立てになっていたのです。彼は本当のことを言うと台詞を覚えるのが大の苦手だったのですが、この点にこそ、彼の本領発揮のチャンスがありました。芝居をやりながら、いつも台詞を間違えるのですが、そこから台本上にはない即興の筋道へと展開していくことがしばしばでした。そして台本作者は苦々しい思いを抱くのですが、お客は喜ぶことが多かったのです。夕方から始まったお芝居も今やクライマックスに近づいていました。共演の男はわざと白紙の何も書かれていない手紙を差し出しました。これは相手を困らせてやろうと考えたのではなく、即興の評判高い名優の実際を体験してみたいものだと、むしろ好意から出たことでした。ところがどうでしょう。この日、名優といわれる男には、何かしら言いようのない一つの不満がその胸に渦巻いていました。彼は俳優業から足を洗うつもりで最後の舞台に立っていたのです。彼は白紙にチラッと視線をやると、手渡した男に紙片を返却しながら、今日は眼鏡を忘れてしまってね、君、読んでくれないかな？と言ったのです。このあとお芝居がどんな風に進行したのか、述べる必要があるでしょうか？一枚の白い紙は、もう一人の男の手から、まるで鳥が飛び立つように、空中にひらひらと舞い上がっていったのです。

